



TITLE:

金石文の辭書編纂方針に就ての一試案

AUTHOR(S):

内藤

CITATION:

内藤. 金石文の辭書編纂方針に就ての一試案. 東洋史研究 1936, 1(5): 463-463

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/138697>

RIGHT:

⑩Cordier, L'expédition de Chine de 1857-58 (一八五
 7—一八八の支那遠征), 1905; L'expédition de Chine
 de 1860, 1906.

⑪History of the War between Japan and China,
 compiled by the Imperial General Staff, and
 transl. by Major Jikemura and Rev. Arthur Lloyd,
 1904.

⑫D'Anthouard, La Chine contre l'étranger: Les Bo-
 xeurs (外人に抗つて支那拳匪), 1902.

Clementy, The Boxer Rebellion, a political and
 diplomatical review, 1915.

⑬Martin, The Siege of Peking, China against the
 world, 1900.

⑭Weales, Indiscreet letters from Peking, 1907.

金石文の辭書編纂方針に就ての一試案

近來支那に於て甲骨文や金石文の研究が盛になるにつれて金石文の文字の形態を示す爲に作られた字引の類は
 十指に餘る程であるが、それ等はいづれもその檢索の方法が現在の漢字から引く様に出來て居る。従つて或る金
 石文の文字を見てそれが現在のどういふ漢字に相當するものかを知らうとする場合には非常に不便であり、終に
 分らない場合も屢々あるといつた有様である。蓋し金石文は現行文字の如く畫が一定して居らなかつたり、同じ
 字でも色々な書き方があつたりして之を組織的に順序立てゝ並べる事が非常に困難な爲に、金石文の方から引け
 る字引の必要をば誰もが感じて居ながら未だに之を能くしないのであらうと思はれる。そこで私は不完全ながら
 之に對しての一つの思ひ付きを掲げて見やうと思ふ。それは一口に言へば線のクロス並びに線の端の數によつて
 金文の字を並べやうといふのである。其原則を簡條書きにすると、一、「」型クロスの數、二、「丁」型クロスの
 數、三、「十」型クロスの數、四、四つ以上の線の集つて居るクロスの數、五、線の尖端の數（點は一と見做す）
 六、互に交る所のない線のグループの數。（例へば川といふ字は三つ、回は一、弓は一つのグループである）之
 等の數（一つもない時は〇）を數字で並べて、その數字によつて檢索することは例の四角號碼等の方法と同様であ
 る。印刷の都合上今假に現代の漢字で例を示すと弓は 600021 忠は 502085 とし、工合である。60021 を 6,21
 502085 を 502,85 といふ風に終りの二字だけを、で區切つて 0 を省いてもいふと思ふ。勿論この方法では仲々適
 用の困難な字も出て來るかも知れない。大方の御教示を得て完全な方法に達する事が出來れば幸である。（内藤）